

---

# 笑顔にまつわるマジックショップ

甘森礎苗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

笑顔にまつわるマジックショップ

### 【Nコード】

N2202BA

### 【作者名】

甘森礎苗

### 【あらすじ】

日本のとある町に、不思議な噂の店があつた。なんでもその店に入ると、どんな悩みでも綺麗すっきり解決してしまうのだという。誰もが一度は訪れたい店だが、出入りできるのは特定の人だけだとか……。

へんてこな魔法使いと、それに振り回される人達の日常のお話です。

e p 1 - 1 君にほんの少しの希望を（前書き）

本作を読もうとしてください、ありがとうございます。  
稚拙な表現かと思いますが、どうぞよろしく願います。  
あなたにとって一時の娯楽になりますよう。

甘森礎苗

## ep1 - 1 君にほんの少しの希望を

帰宅ラッシュの電車から大勢の人間がホームに降りた。

過密状態の閉鎖空間に長時間投獄され、体力はすでに奪われている。夏が本格的に始まるうとしているこの時期の車内は地獄の業火のごとく室温を跳ね上げ、乗客を自然と蒸し殺す処刑空間へと豹変する。

自分と同じようなサラリーマンの人混みに紛れながら、ふなやまのりこ船山悟はやつと地獄の帰宅電車から脱出した。

いつもなら帰りは気分が軽いものだ。自宅まで戻るのが面倒だが、到着すれば自分の空間が待っている。

今日はお気に入りの釣り竿の手入れをしようか。

それが終わったら今夜も彼女に電話をかけようか。

帰ったらすることを考えるだけで、いつもの船山は楽しい気分になっっている。

ところが今日はそうはいかない。予定があるわけではない。極度に気が向かない理由があった。

今日、恋人に振られた。

恋愛経験が少ない船山にとって、失恋のショックは大きかった。

それだけならば話は単純だったろう。心の傷は時間が癒し、また新しい恋に巡り逢っただろう。

だが事はそう単純にいかなそうだった。未練があるわけではない。もっと別の問題だ。

元カノに熱愛していた船山は、恋人が可愛いあまりにいろいろな物を買ってあげていた。彼女が欲しがる物は必ず覚えておき、手に入れられるように様々な工夫をした。俗に言う『ミツグ君』状態だ。

無理のある買い物を続けていくと貯金など塵のように飛んでいく。求められた品物が高額なら尚のこと。船山も同様だった。

貯金が底を突いても彼女の物ねだりは止まらず、船山はプレゼントを愛情と決め込み、無理をし続けた。

その結果、船山は借金をすることになった。貯金が足りないと自覚していた船山は、キャッシングカードを使用して仮初めの資金を作っていた。

船山の自宅はアパートのため土地を担保として借金することはできず、通常の銀行からの借金として積み重ねていった。

彼女に好かれたい。彼女にもっと振り向いてほしい。その思いで、船山は危険な手段を取り続けた。

しかし、その努力は実ることはなかった。

今日の昼休みの前、彼女から突然メールが送られてきた。

内容は「別れてほしい」という素っ気ないものだった。

電話は繋がらず、狂ったようにメールを送ったら、すでに本命の恋人がいるという内容が返ってきた。

真偽は不明だが、船山は間男として貢がされていたということになる。

彼女への思いは粉々に砕け、目の前が真っ暗になったような気がした。

手元に残ったのは、無機質に印刷された銀行明細書と借用証明書。

累積借入金額は優に一千万円を超えている。貯金がある頃ならば工面次第で何とかかなりそんな金額だったが、今の船山は無一文に等しい。

船山の月給は手取りで二十数万円ほど。給料全てを返済に充てても五十年かかる。定年までに返済できる額ではない。

低金利の銀行や大手クレジットカード会社からはすでに多額の債務があるため、これ以上借りるのは望みが薄い。

貯金がない現在、五十年もの時間を、金銭を消費せずに生活する術など持っていない。

どうすればいいのだろう……。

またブラックでも借りることができる金融機関を探さなければならぬのか……。

いや、仮に見つけられたとして、残りの人生を借金返済のために費やすことになるのか……。

この先、俺は何を希望にして生きていけばいいのだろう……。

希望の見えない先が予想されて、船山の目に涙が滲んだ。

考えても考えても良案は浮かばず、背筋が曲がる。考えないように頭を振り、遠くの景色を眺めると、彼女の顔が思い出され、すぐに現実の問題を想起させられる。

鬱々とした気分で、船山は駅の入出口をくぐった。

なんとなく周囲を眺める。

自分と同じような安物のスーツを着て家路を急ぐ男性達が自分を追い越していく。

自転車の籠に買い物に乗せ、後部座席には幼稚園児を乗せながら道路を走る女性の姿が通り過ぎる。

部活帰りなのか、スポーツバッグを肩にかけた高校生が対向からすれ違う。

自分と同じ人間なのに、平凡な生活をしているはずなのに、彼らが無性に羨ましく見えた。

一生懸命頑張れば成果が期待されている。不満はあっても、家族や仲間と話す余裕がある。

自分にはないものを、周囲の人間は全員持っていた。

どうしようもない現実を抱えている自分。  
どうしようもない未来が待っている自分。

船山の目は知らないうちに涙ぐんでいた。

周りの人間が不思議そうに一瞥し、気味の悪そうに自分から距離を取る。

助けてくれたっていいじゃないか。

「どうしたんですか？」ってだけでも話しかけてくれたっていいじゃないか。

極めて惨めに思えた船山は、その場から逃げるように歩き出した。  
後ろへ去っていく周りの店。

アスファルトに直接書かれた道路の標識。

客寄せをしている若いスタッフの声。

ちらちらと眼や耳を刺激するそれらを嫌に思いながら、少しでも早く自宅に帰ろうと足を進めていた。

その途中、ふと店の明かりが視界の端に映って、船山は立ち止まった。

煉瓦調の外装で覆われ、一点の曇りもなく磨かれたガラス製の出入り口のドアを持つ店だった。店内の様子を窺うと、ちらちらと人が動いているのが見えた。

一階建てのこぢんまりとした建物を見て、船山は不意に疑問に思った。

こんな店など、今まであっただろうか？

会社に勤めて八年目。この通勤道路を使って馴染んでいたつもりだが、このような店があったかどうか記憶になかった。

船山は見上げ、店の名前を探した。

何も書かれていない。ただ外装があるだけだ。

不思議な店だった。ただ店内の光が漏れていたのを見つけただけに、視線を話すことができない。

入ってみよう。気晴らしにはなるだろう。

動機などなく、気が向いたからという理由で、船山は惹きつけられるように店の扉を押した。

チリンチリン、と扉に取り付けられていた鈴が鳴る。中にいた人間がその音に反応し、船山のほうへ振り返る。

「いらっしやいませ！」

出迎えたのはとても若い少女だった。見た目は十三、四歳ほどのスタッフで、若いというよりも幼いと形容したほうがしっくりくる。挨拶の声は子供の特徴的な高い声で元気がいい。

女の子の格好は、何かを狙っているのか、メイド服だった。紺の半袖パフスリーブワンピースは膝丈のスカートの上に白いフリルが付いており、その上に清潔さのある白のエプロンを重ねている。頭にはヘッドドレスを載せ、髪の一部を飾りの付いた髪留めで小さく

括っている。足下は黒のオーバーニーソックスに結い上げの革靴を履いており、格好が本格的だ。

秋葉原を始めとした東京近郊の町にこういった服装を着たスタッフのいる喫茶店が多く営業しているとは聞いたことがあるが、実際に目の当たりにしたのは初めてだった。地元の駅前でこういう店があるなんて聞いたことがない。

若い店員はダスターを手に持っていた。店内のテーブルを拭いていたらしい。

「すみません、ちょっと掃除をしまして。こちらへどうぞ」

そう言つて案内されたのは、店内の向かつて左側にあるカウンター席だった。今はカウンターの向こうに店員はおらず、他の客もいない。

船山は促されるままに席に着いた。

「ただいまカウンター担当の者を呼んで参りますね。よろしければこちらをお使いください」

女の子が差し出してきたのはおしぼりだった。仕事終わりで満員電車に乗ってきて汗まみれとなっている身にとってはありがたい代物だった。

船山がそれを受け取ると、メイドスタッフはカウンターの奥に消えていった。

一人だけで残された船山は、メニューを見る前に店内をぐるりと眺めた。

内装は木目調の素材を基調に、落ち着いた雰囲気演出している。

フローリングは綺麗に磨かれ、自分のみつともない顔が映って見えそう。派手な色は避けているが、店内は明るい照明で照らされ、薄暗さや陰湿な感じはしない。

客用のテーブルは五人まで座れるカウンター席の他に、四人席のテーブルが三つ設置されている。先ほどのメイドスタッフが丹念に拭いているため清潔に保たれている。

カウンターを挟んだ向こうの棚には、様々な種類の瓶が並べられている。ジュースのものやアルコール類、コーヒ―豆に茶葉と、飲み物関係の中身が大多数を占める。その他にも砂糖や七味唐辛子のような調味料も置かれている。

船山が背を向けているほうの壁には、いくつものアクセサリが飾られていた。種類は様々で、女性物ばかりかと思ったが男性向けのデザインのものも見かける。

どうやらこの店は、カフェ兼アクセサリショップらしい。

「ちょっと店長！お客さんが来たんですからさっさと表に出てください！」

「待つてよすきちゃん！もうちょっとでベストスコア出せそうだから、てきとーに時間稼いで！」

「そんなもの、あとでもできるじゃないですか！いいからさっさと来てください！」

「ここまで来るの大変だったのよ！？もう指なんか皮が剥がれそうなのよ！？」

「本編の攻略に関係ない『ばくれつカブト虫』なんかにそこまでの

めり込まないでください！一千万点も行けばもう充分でしょ！」

「やだ！ここまで行っただけにはカンストさせてみせるッ！」

「店の営業とゲームとどっちが大事なんですかあ！！」

メイドの少女が消えていった奥から、女性同士の喧々囂々とした会話が聞こえてきた。

何をしているのかは見えないが、会話の内容から、どうやらカウンター担当である店長の女性がテレビゲームが何かに熱中しているようで、それを女の子がやめさせようとしているらしい。

「騒がしくてすみません。もうすぐ来ますので」

カウンターの奥から青年が現れた。二十歳ぐらいの、まだ未熟さの拭えない雰囲気がある。綺麗にアイロンが消されたワイシャツとラインの折られたスラックス、ベストとネクタイを着用している。バーテンダーのような男性だった。

「お待ちいただく代わりに、お飲み物をご用意させていただきますが、何に致しましょうか？」

急に注文を受け付けることになり、船山は焦った。まだメニューも何も見ていない。

「えっと、すみません、メニューをまだ見ていないので……」

申し訳ないと思いながら白状すると、男性は穏やかに微笑んだ。

「ご心配なく。当店にはメニューはございません。好きなものを

仰っていただければ何でも承りますよ」

「な、何でも……？」

「ええ、何でも、です」

男性は笑顔で断言した。

さらりと一言で言っているが、男性の言葉の含意は無茶苦茶である。

『飲み物』で分類できる種類は数え切れないほど存在する。清涼飲料水や炭酸水などの飲料水、果汁を基礎にした果実飲料、牛やヤギから採れる動物性蛋白質の乳製品やヨーグルトなどの植物性乳製品、麦茶や紅茶などの紅茶飲料、アメリカンやブレンドなどに分かれるコーヒー飲料、ビールや日本酒などのアルコール飲料……。

一般に商品として出回っている種類ならともかく、地方限定で作られているものや商品として作られていない文化独特の種類も少なからず存在する他、日本にとどまらず世界中で作られている飲み物を含めると千差万別だ。そこに、二種類以上の飲み物を組み合わせるカクテルまでも範囲に入れると、その数は無限といわざるを得ない。

大雑把に列挙しても一つの店が提供できる量ではなく、材料の保存に莫大な維持費がかかる。

また、バーテンダーやソムリエの有資格者であっても一人の人間が覚えきれぬ数でもないことは確かだ。

「……」

男性の言うことが本当なのか、船山は出来心で試したくなった。

「じゃあ、エスプレッソを、お願いします」

「風味はアメリカンやブレンドなどございますが、いかが致しましたでしょうか？」

「……ナポリ風につてできますか？」

「かしこまりました。只今ご用意いたします」

明朗な返事とともに、男性は準備に取りかかった。

カウンターからは作業の様子が丸見えになっている。どのような行程で淹れているのか見物したくなつた。万が一紛い物を用意しようものならクレームを付けるつもりでいた。

男性はまず、カウンターに据え付けられているエスプレッソマシンのタンクを開け、水を補給した。

次にコーヒーを濾過させるためのバスケットを用意し、そこに挽き立てのコーヒー豆の粉を適量詰める。男性はヘラを手に取り、バスケットに詰めた粉を絶妙な力加減で押し固める。コーヒー豆からの抽出の場合、この力加減一つで味が変わると聞いたことがある。

それが終わるとバスケットをマシンのホルダーに取り付け、スイッチを押した。

男性はデミタスカップを用意し、抽出口にセットする。蒸気とともにマシンの注ぎ口から少量のエスプレッソがカップに注がれていく。知る人は知っている最初の抽出されたエキス、いわゆる『一番だし』のコーヒーだ。凝縮した風味と新鮮な香りが飲んだ人を虜にする、通の者垂涎のエスプレッソである。

注ぎ終えたエスプレッソに男性は山盛りの砂糖を二杯入れ、素早く混ぜ合わせた。こうすることで濃厚なカフェと砂糖が攪拌され、クリーミーな甘いカフェエクスが出来上がる。“ナポリ風”というのはこの部分が特徴なのである。

日本での一般的な淹れ方は、コーヒーを注いでから砂糖などを入れて好みの味に調節する。しかし、ナポリ風では濃厚なエスプレッソを考慮して初めから砂糖を混ぜ、まろやかな風味に仕上げる。この点を知っているということは、何でも用意できるという男性の言うことはあながち嘘ではないのだと思えた。

下ごしらえが終わったところで、男性は改めてマシンからエスプレッソを注いでいく。

ゆっくりとマドラーで混ぜ合わされるその作品に、船山はいつの間にか釘付けになっていた。

「お待たせいたしました。どうぞ、ナポリ風仕立てのエスプレッソでございます」

数分で用意された一杯のコーヒー。濃厚な黒い液体に芳しい香りを立てるのは、まさしく自分が望んでいたエスプレッソだった。

カップの柄を持ち、淹れたてのそれに口を付ける。

「っ！」

口の中で広がるコーヒー豆の凝縮された味と香りが、船山に何もいえない快樂をもたらした。全て計算し芳醇な香りを最高に引き出したこのコーヒーは、エスプレッソの特徴を見事に表現している。

一昔前、海外への出張でイタリアのナポリへ飛んだ時、友人に勧

められて仕事の帰りにカフェへ寄ったことがあった。日本にいた時も日常的にインスタントのコーヒーを飲んでいた船山は、イタリアに來ただけでわざわざ飲まなくてもいいと思っていたが、友人の強い推薦で一度経験することにした。

そこで飲んだのが、エスプレッソだった。

はじめは気が進まなかったが、そのコーヒーは慣れない海外での仕事で緊張し疲弊していた船山の心を癒した。また、店員の振る舞いや店内の雰囲気意外にも落ち着いていて、居心地の良さを感じた。

あとで知ったことだが、イタリアではちょっとした空き時間があれば店に立ち寄ってコーヒーを飲む風習がある。店内の和やかな雰囲気は文化から出来上がった自然の空気だったのだ。

船山はイタリアにいる間、仕事終わりには連日のように町に出向いてはカフェに寄って本場のコーヒーを堪能するようになった。

何年も昔の話だが、あの頃は楽しかった。仕事は多忙ながらも順調で、知らないことを覚えていくことが楽しかった。未来に不安はあっても、熱意と誠意があれば何だって乗り越えられるような気がした。

それが、今では……。

「お待たせしましたー！ ちょっと用事で忙しくってー！」

間延びする声カウンター奥から聞こえた。どうやら店のマスターが來たらしい。

現れたのは二十代前半と見える若い女性だった。肌は透き通るような白さだが、仕種や態度から不健康そうな印象はない。顔立ちは可愛さの溢れる整い方をしており、日本人離れしている外見からし

て少なくともハーフだと思える。

つぶらな瞳と背中まで伸ばした髪は、思わず目が向いてしまうような赤い色をしていた。現実的ではないものを目の当たりにしているが、不思議と警戒心は起きず、珍しいものを見るような気持ちで引き付けられた。

服装はノースリーブブラウスにブラックとロイヤルパープルのツインタイを締め、漆黒のロングスカートを履いている。

快活さと気楽さを兼ね合わせたような格好をしているが、言動は明らかに後者に傾いているように思える。

「……って、あら？もうご注文はお済みのようですね？」

船山の前に用意されたエスプレッソを見て、女性はすでに最初の注文が終えていることを知ったようだ。それに対して、男性が穏やかに答える。

「少々時間がかかると思いましたので、僭越ながら先に承っておきましたよ」

「さっすが！どこかのお転婆娘より気が利くわね！」

「気が利かないお転婆でどうもすみませんでしたね！」

女性の後ろから、先ほどのメイド姿の少女が顔を出した。その表情には少し疲弊の色が浮かんでいる。どんな説得があったのかは窺えなかったが、店長である女性の腰を上げるのに大変苦労したらしい。

「信矢、飲み物はいいけど、お菓子は？」

「いえ、まだお出ししていませんが……」

男性の反応に、女性は目を釣り上げた。

「ダメじゃないの！早く用意して！私も食べるから！」

「自分が食べたいだけなんです……」

男性は苦笑しながら裏に消えようとした。

「ほら、マドレーヌで良ければ用意しといたよ」

裏から別の従業員が片手に皿を持ちながら出てきた。

見た目の年齢は、四人の中で断トツで低かった。高く見ても十歳前後、あどけなさしかない外見の女の子だった。

そして何よりも目を引くのが、白い長髪だった。腰まで長く伸びた髪は生え際から白一色で、銀髪に染めているというよりも白髪になっっているように見える。

女の子は簡素なＴシャツに、猿なのか豚なのかよく分からないアップリケが付いたエプロンという、家庭でお菓子作りでもしているかのような恰好だった。現に、その手には作り立てのお菓子が載った皿がある。

「ありがと、荊歩」

お礼を言いながら女性は皿を受け取る。その皿を、船山の目の前に置いた。

「どうぞ、茶請けのつもりで召し上がってくださいね」

船山は出されたマドレーヌを戸惑いながら眺めた。

「あの、注文していないのですが……」

「ご心配ありません。こちらは当店からのサービスです。もちろんお勘定には含みませんよ」

男性が爽やかな笑顔で言った。

代金が不要と知っただけで妙な焦りが霧散した。同時に、せこいところで神経質になっっている自分が卑しく思えた。いくらお金の問題を抱えているとはいえ、過敏になっている。

食べてもいいと許可が出たが、日本人の性が、目の前の食べ物に飛びつくのは憚られた。

「何を躊躇っているのか知りませんが、遠慮なんかいらないですよ。他にもないあたしが作ったんだ、味も保証します」

少女は布巾で手を拭きながら表に出てきた。

見た目は幼いのに、大人に囲まれながらも怖じ気づかない姿勢が不思議だった。言葉遣いは端々に未熟さが見られるものの、子供らしい無知による無邪気な無礼ではなく、きちんと社会を知った上での弁えた振る舞いがあった。

「というか本音を話しますと、お客さんが食べてくれないとうちの従業員も食べられないんですよ。いちおうそれが店のルールです」

少女は「あはは」と苦笑しながら頬を掻く。

最初の一口目はお客様から。  
そういう規則があるのだろう。  
周りを見ると、他の店員も同じような反応をしている。

船山は集った店員たちを見比べた。

せいぜい中学生にしか見えないメイド姿の少女。  
頼りない雰囲気がありながらも客の注文を何でも用意する成人く  
らいの男性。

この中でおそらく年長者なのだろうが年下の従業員に怒られてい  
る、店長らしき女性。

お菓子を片手に、大の大人を前にして堂々と接する女の子。

不思議な光景だと思った。

外見で判断するべきではないことは重々承知している。先程のコ  
ーヒーの件から、店員のスキルは十二分に達していると判断できる。  
しかし、目の前に広がっている店員の平均年齢が低すぎるように  
思えてならない。

一つ間違えれば、子供のままごとのスペックを著しく進化させた  
ようなものに見えた。

不思議な点は多々あるが、出された物に手を付けないのは失礼な  
気がして、船山はマドレーヌを一つ手に取り、嚙った。

大きさを考えて作られてあるせいか、食べやすかった。固すぎず、  
柔らかすぎず、適度な歯ごたえを持たせてある。間食として食べる  
お菓子に最適だと思った。

味も控えめにしてあり、生地も少し瑞々しさがあって食べるのが  
苦にならない。味の濃いコーヒーとちょうど良く合う。

「……美味しいですね、これ」

素直な感想が船山の口からこぼれた。

「よく分かったな。今日のそれは最近の中でも出来がいいぞ」

エプロン姿の女の子が、ふふんと鼻を鳴らして胸を張っている。

「こんなに美味しいものがまだ食べられるなんて、世の中わからないものですね」

多額の借金を背負ってから、船山の人生は一気に狂った。身を削る思いで、爪に火を灯す日々を送り始めていた。

自分の人生は終わった。そう思っていた時に、このような美味しいものを口にできるなんて思わなかった。

船山は今まででかしてきた自分の愚行と、この先暗闇でしかないこれからの自分の未来を考えて、あまりにも惨めに思えてきた。

食べかけのマドレーヌを持つ自分の手に涙が落ちて、ようやく船山は泣いていることを自覚した。

「す、すみません！せっかく美味しいものをいただいているのに……」

慌てて目元を乱暴に拭う。しかし、誤魔化そうとしても気持ちはさらに悲鳴を上げ始め、溢れた涙は止まらない。

どうしてこんなことに。

どうして自分がこんなことに。

どうして。いつ間違えた。どこで道を外れた。

こんな、こんな日が来るなんて、これからどんな気持ちで生きていけば。

「……う」

船山はカウンターのテーブルに突っ伏し、思い切り泣いた。

「わあああああああああ！！あああ！！うあああああああ！！」

堪えようとしても、悲しみが心の底から溢れてくる。

悲しいのは、多額の借金ができたことなどではない。

好きな女性に裏切られたことが、船山にとって一番悲しいことだった。

プレゼントを送っていたことが愛情表現だと言いたくはない。しかし、恋愛経験の少ない船山にとってはそれが最も表現しやすい愛情だった。

本当は理解してほしかった。

幼稚な手段だが、君を愛しているということを少しでも感じてほしかった。

それが叶わないと知り、一人残された船山は、彼女への恋心が全て悲哀の感情へと変化してしまった。

ひとしきり泣き散らし、テーブルには落ちた自分の涙が跡を作っていた。

そこに、そっとハンカチが差し出される。

「悲しいことがあったんですね」

店長と呼ばれていた女性が、船山を思いやった言葉をかけてくれていた。最初とは打って変わって慈悲深い雰囲気を出し、何も

かも受け止めてくれるような抱擁感を感じさせた。

「もし良かったら、お話を聞かせていただいけませんか？貴方が今持っている、一番悲しいお話」

お話というのは、おそらく自分の愚かな失恋話のことだろう。

何のつもりかは知らないが、店員が客の失敗話を進んで聞こうとするなんて妙だと思った。

バーのような店であればそのようなこともあるだろう。また、常連となり、店員と仲睦まじくなった客であれば、愚痴の一つや二つを聞くことはあるだろう。

しかし、船山は今日初めてこの店に立ち寄った。店員とは二、三の言葉しか交わしていない。

それだけの関係なのに、どうしてそんなことをあけすけに語る必要があるのだろうか。

自分の気持ちに土足で踏み入れられようとしているように感じた船山は、不快感を抱かずにはいらなかった。

周りには自分よりも若い人間ばかり。その中で、自分の青臭い失恋話を暴露しなければならないというのか。

もしかしたら、この場にいる全員で自分を笑い上げるつもりではないのか。今までの過ぎたサービスも、話を引き出すための策略だったら。

「……ご心配の多いことかと思いますが、そのようなことにはなりませんので安心してくださいな」

疑心暗鬼に陥り、警戒心を強めた時、女性が言った。

まるで、船山の心理を読み取っているかのような、見事なまでの

タイミングだった。

「来て間もない貴方にとっては不思議かも知れませんが、ここはそういう店ですから。私たち店員も、お客様からの話は他言無用を徹底しておりますし、話の内容にかかわらず笑ったりなどという無礼はしないとお約束いたします」

女性はカウンターに体重を預けるように、体を乗り出す。女性の一連の動作が妙に艶めかしくて、船山は釘付けになった。

軽装のせいで、服装の上から体のラインが浮き出ている。服の裾から覗く素肌の白さが異性を見た時の高揚感を誘う。頭髮の艶のある赤が嫌でも目につく。瞳の赤みが自分を見つめてくる。

「さあ、教えて……。貴方を支配している、貴方のお話を……」

女性の寄り添うような言い方とともに、船山の頬に手を触れてきた。

柔らかく、温かなその感触に、船山は意識がぼんやりとしてくる。眠たくなったわけではないのに、目の前の女性にしか目が行かなくなる。他のところは薄ぼんやりと霞み、見つめてくる女性の目や囁きかけてくる声にしか気が回らなくなる。

「……」

何も考えられない。

何も思いつかない。

何も疑えない。

船山は我を忘れたように、これまで自分に何があったのかを話した。

出来事をありのままに口に出していく。装飾も誇張もせず、しかし自分の感情を忘れずに付け加えて説明していく。異性にいいように利用された失敗の色事だというのに、聞いている人間は全員自分よりも年下だというのに、船山は恥など全く感じていなかった。話している自分が自分でなくなったかのように、話す上で障害になる感情が全く浮かんでこなかった。

出来事の全容を話し終えると、船山ははっとなった。何をぺらぺらと喋っていたのだろう。せつかくの場なのに、つまらない話を我を忘れたように白状していた。

一度自覚すると、自然と恥ずかしくなってきた。顔を真っ赤に染め上げ、言い様のない後悔の念に駆られる。

この場に居たたまれなくなった船山は、手元の鞆を慌てて取り上げ、席を立つ。

「あ、あの！すみませんでした！自分はこれで……」

「あら、お代も払っていただけなのですか？」

「あつ……」

船山はまだ会計を済ませていないことに気づいた。飲食を提供してもらった身だというのに、そそっかしいにも程がある。

船山はポケットから財布を取り出し、代金を払おうと金額を尋ねる。

「そうですねえ……ところでお客様、小銭は今お持ちですか？」

「え……こ、小銭ですか？」

女性は妙なことを訊いてきた。

相手の懐具合から代金を考慮する商談は間々あることだ。しかし、その場合は「今いくらお持ちか？」と訊くことが多いはずだ。

しかし、この女性は相手の所持金全額ではなく、小銭に限定して尋ねてきている。船山にはその意図が分からなかった。

「はい、鳴らすとちゃりんちゃりと音が出る、あの小銭です」

「小銭にその印象しか持っていない人は店長ぐらいですよ」

脇にいたメイド姿の少女が呆れながらツツコミを入れた。

船山は質問の意図が思いつかず、諦めて財布を開く。小銭が入っているところを確認する。

この財布で小銭入れにしている場所は一つしかないので、全ての小銭が無造作に入っている。釣り銭が嵩んだ時には財布が膨らんでしょうがない代物だ。使える時に使っておかないと、沢山の釣り銭が返ってきた日には地獄を見る。

今持っている小銭は、三百三十六円だった。小銭の量はそう多くはないが、あまりいい気にはなれない。語呂合わせで三三六さんさんみろとは自分らしい。

「ふむふむ。なるほど」

カウンターの向こうにいたはずの女性がいつの間にか隣に来て財布を覗き込んでいた。

「なっ！？」

突然の行動に船山は驚いて一步下がった。

財布は人の金銭事情を如実に反映している。お世辞にも潤っているとはいえない船山にとって、女性の行動は失礼だと思った。

「それじゃあ、」

女性はおもむろに片手を伸ばすと、下向きだった掌をくるりと反転させ、上向きにさせた。

その指には、今さっきには持っていなかったはずの銀色の物体が挟まれている。

「お代はこちらをいただきますね」

女性が持っているのは、百円硬貨が三枚。

船山は思わず手元にある財布をもう一度見た。

……なくなっている。

ついさっきまで入っていたはずの、三百三十六円のうちの三百円が、綺麗になくなっていく。

それは財布から抜き取った物なのだろうが、いつそれが行われたのかは分からない。女性は財布に触れるどころか、手を伸ばしてすらいなかった。

ただ、女性が手品か何かを使って、船山の財布から百円硬貨三枚を抜き取ったことになる。そうでしか説明できない。

船山は絶句した。

「それと、これは当店からのサービスです」

女性が船山のネクタイを掴む。突然のことに反応できなかった船山は反射的に硬直してしまった。抵抗する前に、女性はネクタイを自分のほうに力任せに引っ張る。

「っ!？」

何が起こったのか一瞬理解できなかった。  
突飛すぎて思考が追いつかなかった。

起きたことが事実だと思えなかったが、感触が事実を肯定している。

女性は船山と唇を重ねていた。

船山の気持ちを一切無視して押しつけているのに、口に触れる感触は柔らかくて心地がいい。その感触に、船山は我を忘れて硬直する。

口元に伝わる温かな感触。

時折わずかに擦れることで魅入られる生々しさ。

どれだけの時間が経った忘れてしまった。

ふいに女性がするりと離れた。女性から離れるまで、船山はされるがままだった。

「ではごきげんよう。帰り道はお気を付けくださいね」

間近でにつこりと笑顔を見せつけられ、船山はいても立ってもいられなくなった。鞆を握り直し、逃げるように店を出た。

わからない。

何が起こった。

どうしてあんなことになった。

全力で走りながら、店の中で起きたことを反芻する。

視界の端を過ぎ去っていく人に奇妙な目で見られようと、走る

のをやめられなかった。

ただ、スーツに革靴ではさすがに走りにくい。加えて、しばらく運動などしていなかったから体力の消耗が激しい。

船山は限界を感じたあたりで走るのをやめ、近くのガードレールに手をついた。チョーキング現象によって白い粉が付いてしまいが、構っていられなかった。

肩で息をしながら、首を絞めるネクタイを少し緩める。

手を離す時、何かに当たった。見下ろすと、ネクタイに見覚えのないネクタイピンが着けられている。一応自分で持っている物はあるが、今自分が付けているようなデザインではなかったはずだ。

自分が持っていたのは装飾のない真一文字のシンプルな物。しかし、今付けているのは、ピンの端に宝石のような淡い橙色の珠が埋め込まれている。

船山は特に何も考えず、今走ってきた道を振り返った。

景色の向こうにあるはずの店。離れてしまったが、目を凝らせば見えると思われる店。

しかし、いくら目を凝らしても、いくら見直しても、目当ての店の外観が見あたらなかった。

だいたい場所を思い出して見直しても、そこには出入り口のない古びた壁しかない。

「おかしいな……」

存在したはずのものが無い違和感があるが、それが無い風景は自然そのものだ。

釈然としないが、店で起きた出来事を忘れたくて、船山は帰り道を歩き出した。

店に入る前に抱いていた悲愴の感情は、本人が気づかないほど消え失せていた。

「んっ！これにて一件落着つと！」

女性の背伸びとともに漏れた一言によって、その場の緊張感が一気に霧散した。

来客が帰ったことで、仕事場には外向きのために繕っていた仮面が剥がれる。それぞれのメンバーは深呼吸をしたり肩をほぐすようにぐるぐる回したりして緊張を取る。

「あのお客さん、店長のキスでだいぶ放心してましたね」

男性が率直な印象を口にした。

「そりゃあ、今日あったばかりの赤の他人にいきなりされたらショックを受けるだろうな。一息つくつもりで入ってきたのに風俗店紛いのことをされたんだから」

女の子が外見とそぐわない、男勝りの冷静な物言いで返す。

「やっぱりびっくりするんだって。私たちはもう見慣れちゃってるけど」

慣れてはいけないのだが、さすがに毎度毎度同じことをされてい  
ては日常になってしまうのも仕方ないと、すすきは思った。

少女の名前は深町<sup>ふかまち</sup>すすき。

すすきというのは植物の名前だが、漢字で書くと『薄』になって

なんか存在感とか幸とかが薄くなりそうだから平仮名で書く。ちなみにアクセントは最初の“す”だ。『鈴木』ではなくて『吹雪』のような発音を取る。例えば物騒なのは勘弁してほしい。

年齢は十三歳。近くの和良蕊<sup>わらうき</sup>市立中学校に通っている中学一年生だ。

学校の成績はお世辞にも良いとは言えない。得意な教科はなくてだいたいの教科が苦手。勉強下手って言葉がよく当てはまる、特に取り柄のない女の子だった。

今は和良蕊駅の近くにあるカフェにいる。店の名前は『チャーム』。短いが、店名を看板にしていないから大変覚えられにくい。外観や内装を見ると喫茶店のようにも見えるが、商品の一つにアルコール類を扱っているのでカフェに分類されている。

すすきはこの店のウェイトレスとしてアルバイトとして働かせてもらっている。メイド姿に身を包んで働くのは最初抵抗があったが、着てみると着心地はいいし動きやすいし、何より可愛いので今では気に入っている。

「まあ、心の準備とかその前の雰囲気とか、何もなしにいきなりですからね……」

男性がすすきの意見に同意するように頷いた。同じ男性として、先程の客に同情したのだろう。

「おや？ 信矢は前触れがあれば初対面でもオッケーなのか。初耳だな」

それを聞いた女の子が揚げ足を取る。

「誰もそんなこと言ってますんって。それに、その前触れすらも無理だつて荊歩さんも知っているでしょう？」

「まったく、軟弱なのは治らん」

男性が棘のない言葉で否定し、少女は期待外れとばかりに肩をすくめた。

男性の名前はためなが しんや為永信矢。

年齢は二十一歳。大学や専門学校には通っていないが、大学の通信教育で単位を取っている。学生といって間違いない。

背が高く、適度に筋肉の締まった体をしている。すすきは直接見たことはないが、袖口から覗く腕の締まり方からそう予想している。予想でしかないから外れている可能性もあるが。

信矢もこの店でアルバイトをしている。担当はカウンターでのバーテンダーだ。先程の客に出した例があるが、信矢は飲み物関係ならほとんど何でも作れる凄腕だ。すすきが知る範囲で、今までに注文を断ったことがない。

もともとそういうのが好きだったようで、この店に来る前にアルバイトをしていたらしい居酒屋のメニューを覚えきったのだとか。

他にも家庭料理も上手で、飲食店で出されると負けず劣らずと思えるぐらい美味しい。毎日のご飯を作ってくれるのも信矢のおかげだ。

言葉遣いは丁寧だし、性格も温厚で、朗らかな笑顔も見せてくれ

る。

完璧に見える彼だが、唯一にして最大の問題がある。

「はい、信矢さん」

すすきは客が飲み終えたコーヒーカップを片づけるため、信矢に手渡そうとそれを差し伸べた。すすきはテーブルなどのホルの片づけを、コーヒーカップなどの洗い物はカウンター担当の信矢の役目と割り振っている。

何気ないやりとりのはずだが、差し出された信矢は表情を歪め、体を仰け反らせている。

「え、ええ……」

返事はするものの、コーヒーカップを受け取るうとはしない。

その様子を見て、信矢以外の一同は「やれやれ」と溜め息をついた。

信矢は女性に対して極度な拒否反応を持っている。いわゆる『<sup>エミノフオビア</sup>女性恐怖症』という精神疾患だ。

信矢自身もどうにか治したいと思い、そのためにここにいるのだ。この店の店員は信矢以外の全員が女性なので一見地獄のようだが、店長曰く荒療治だがそれしかないとのことだ。この手の疾患を治療するには“慣れる”ことが大事らしく、信矢もこの治療法を受け入れている。

本人にとってはかなり酷な状況だが、一応治療の成果は出ている。本人も治そうと努力しているようだ。現在は一定の距離を取った状態で会話することは可能になるぐらいにまで治療できてきたが、接触や接近状態になると急に恐怖に陥るらしい。まだまだ時間がかか

るというわけだ。

信矢と会話していた少女の名前は銀鏡しろみ荊歩けいほ。

難しくて男みたいな名前だが、れっきとした女だ。ただし見た目に限る。

外見は十歳の女の子なのだが、中身は七十歳を超えているお婆ちゃんだ。戦前に生まれた人が何故そのようなことになっているのかというと、かなり込み入った複雑な説明を経ているとすすきは聞かされている。

とりあえずすすきが知っている事情は、十歳の体で七十年以上生きていられるのは店長とこの店チャームのおかげだということ。この店の魔法で不老の生活を送れているというわけだ。

……今気になった単語が出てきたと思うが、もちろん言い間違いではない。

荊歩の髪の色は真っ白に染まっている。いや、変わっている、と言ったほうが正しいのかもしれない。

詳しいことは分からないが、不老の魔法で外見の老化はほとんど防げているが、唯一頭髪だけが老化を防げなかったと言っていた。

荊歩はアルバイトではない。先ほどの説明と重複するが、“この店にすること”が賃金になっていて、金銭は貰っていないらしい。不老の生活を望むことになった経緯は、何となく訊かないほうがいいような気がして訊いていない。尋ねれば答えてくれそうだが、荊歩も店長も話そうとしないし、生活するのに困ったことはないの、別にこだわらなくてもいいかと思っている。

荊歩は生きた月日を重ねているせい、口調がどうも女っぽくない。凜としている、といえば聞こえはいいが、端々に現れる口癖などは男性のものに思えて仕方がない。そして喋っている見た目がすすきよりも年下の少女なので、なんだか偉そうに見えたり、洪くて逆に愛嬌があったりする。

口調の割に世話好きで、見た目の親近感や知識の豊富さが相まって、すすきにとっては話しやすい相手でもある。

チャームでの役割はお菓子担当。荊歩の場合は公私を問わずお菓子作りが好きだと言っている。趣味が功を奏したというわけだ。

客に出したマドレーヌももちろん彼女お手製で、材料の選び方や作り方や泡立ての力加減や火加減の計算など、もはや熟年の成せる技だ。こればかりは勝てる気がしない。料理上手の信矢も適わないのだそうだ。

いろいろな菓子里に挑戦しているらしく、ケーキなどの洋菓子や饅頭などの和菓子も作れる。レパートリーも豊富だ。

「さてと、客足も一段落したことだし、続きでもしようかな」

店長の女性は機敏な動きで裏に消え去ろうとした。

「待つて！あれだけやったのにまだ続けるつもりなんですか!？」

すすきは思わず制止する。再びテレビの前に向かってゲームを再開しようとしているのだらう。

しかし女性は止まるつもりは端から無いようだ。はな

「違っわよ。今度はトロツコでもやろうと思って」

「ミニゲームは別でもソフトは同じです！」

「目指せ一分五十秒！！」

「無茶言っな！！っていうか仕事しろ！！」

すすきは声を荒げて裏へ消えようとする店長の女性を食い止めるべく、追いかけた。

他の全員が店長と呼んでいるこの女性こそ、チャームのオーナーだ。

名前はトワルカ。名前からしてもちろん外国出身だ。ファミリーネームは聞いたことがなく、あるかどうか分からない。

日本人にはない肌の白さや、赤い長髪と眼という特徴的な容姿を持っている。日本人と同じような控えめな身長をしているが、プロポーションは控えめにバランス良く出ている。見た目だけで見ればすすきが羨ましくなるほどの美人だ。

綺麗な人だが正体はかなりのゲーマーで、新古の様々な作品に手を伸ばしてはやり込んでいる。この間なんて、とあるRPGゲームでマーカーを自力でレベル九十九まで上げたぐらいだ。しかも、自動レベル上げ（エンカウント可能な場所でコントローラーのスティックをテープなどで固定、および連射機パッドを使用して決定ボタンを連打させ、自動操縦で経験値を稼がせる手法）やチート（ソフトウェアやROMカセットの内部データを改造ツールなどを使用して改変し、制作者の意図しない動作を起こさせる行為）などを使わず、自力操作で上げ遂げたらしい。知らない人にはピンと来ないか

もしれないが、とりあえずそのRPGゲームの進行上必須ではないレベル上げで、やればそれなりの報酬はある要素で、しかしながら恐ろしい時間がかかる作業だということだけは断言しておく。

こんな中身だが、トウルカは魔法を駆使できる。俗に言う『魔法使い』だ。

信じられないかもしれないが、すすきも含めてチャームの従業員はそれを目の当たりに行っているのだから信じるしなくなっている。

どんな魔法が使えるかという点、トウルカ曰く「さあ？とりあえず好きなやつ全部かな」とのこと。よく分からないが、好む種類の魔法はあらかじめ使えるらしい。

荊歩の不老もトウルカの魔法によるものらしい。チャームの店全体に魔法をかけ、荊歩に不老の体を与えているというのが受けた説明だ。原理はどうなっているのかは知る由もないが、歳を取らないなんて非常識な現象を、彼女は日常的に起こしているということになる。

ちなみに、不老の魔法はトウルカ自身は使っていないそうだ。魔法使いはもともと肉体的な老化がとて遅く、寿命近くまで変化が現れないという。

他にも、魔法を商売の所々で使っている。今回の客にも、マドレーヌを受け取った時に感情を暴発させる魔法をかけていたし、直接ほおに触れた時に自白の魔法をかけて失恋の暴露話を晒し出させたのだから恐ろしいにも程がある。

また、客の男性にはさりげなくネクタイピンをプレゼントしておいたのだが、あれにも魔法がかかっている。

どんな魔法なのかすすきが尋ねた。

「見てなさい。あの男の人、この間ミニロトを買ったのね。それが

見事一等に当選して賞金約一千万円ゲットするわよ」

「……ええっ!？」

「うーん、我ながら美しい人助けよね!こんなの他に類を見ないわ!」

「ま、待つてください!ロトシックスの当選確率って、ものすごく低くなかったですか？」

「ミニロトだと、三十一種類の数字から五個を取る組合せだから、コンビネーション三十一の五で十六万九千九百十一通りかしら?ロトシックスの確率はもう少し低いけど」

「なんで当たるなんて分かるんですか!そんな大金、次の抽籤で都合良く当たるなんてありえないでしょ!？」

「ふふっ、私を誰だと思ってるの?ロトシックスの当選番号は電動攪拌式遠心力型抽籤機、通称『夢ロトくん』を使ったアナログな方法で無作為に決定してるのよ。そんな乱数なんて私の敵じゃないわよ」

ちなみにネクタイピンにはその当選一回で魔法が切れる仕様にしてあるらしい。非常識なことをしでかしている割には抜け目がない。

「……まさかとは思いますが、生活費とか私たちの給料まで、その宝くじから出てるなんて言わないですよね?」

「あら、察しがいいじゃない。さすがに毎回は当てないけど、必要になったら適宜当ててるわよ。盗難でも犯罪でもないのに、働かず

に堂々と大金を手に入れる快感はいつでも気持ちいいわ」

確かに、さすがの司法も魔法という非現実的な手段を根拠として取り締まる体勢など想定していないだろう。

“当たった”のではなく“当てている”トウルカの存在は、頭の先からつま先まで無茶苦茶だと思った。

人生を左右する大金の行く先を鼻歌交じりに変えてしまうトウルカを前に、すすきは捨て鉢の思考に走りたくなった。世の中お金に苦しんで一生懸命働いている人達がどれだけいると思っているのだろうか。

それにしても一千万円というのも多額だが半端な数字だ。あの男性の借金総額は一千万円以上だったはずだ。あとわずかに足りない計算になる。

そのことを訊くと、トウルカは変わらない笑顔で応えた。

「全額返済まで手を出すと、人間は反省する度合いが減るからね。一千万は無理でも数十万ならなんとか……って思えたら重畳なの。それぐらいの量なら実現可能な期間で返済できるだろうし、金融機関から急かされても家族や会社の人間から借りればまだ間に合うし」

説明しながら、トウルカは腕を組んで自慢げに続ける。

「とりあえず返済の手段はたくさんあるだろうから、多少借金を残してそれをどう返済しきるかがあの男の人の見せ所ってわけよ。借金はなくなくなり、同時に痛い目にも遭えるから反省もできる。こんな素晴らしい復活劇を用意してあげられるなんて、私凄くないかしら！？」

ウザい自画自賛をひけらかしているが、言っていることは間違い

ではない。普段のやることや思うことは人外過ぎるが、こういう時だけ良識を発揮するのだからずるいと思う。

「さてと、そろそろ閉店の準備をしようかしら。すすきちゃん、表の出入り口の戸締まりお願いね」

トワル力はみんなに閉店の指示を出した。

「もう閉めちゃうんですか？いつもならもう少し開けておくのに」

「今日はもういいかなーって。さっきの人で充分搾取できたし」

そう言っ、にこりと笑顔を作る。それだけを見れば可愛い女性という印象を持てるのだろうが、私をはじめとして他の二人も呆れている。

トワル力の魔法は確かに非常識なものばかりだが、使い続けるとやはり疲れるらしい。魔法使いにとって魔力というのは人間のスタミナと同じようなものらしく、大がかりな魔法を使うと相当くたびれるらしい。

そこで、トワル力は他人の情動を魔力に変換して吸い取るとい、危険な臭いのする方法を取っている。先刻の男性客も、泣き出してしまふほどの深い『悲しみ』をトワルナに吸収されている。今頃は沈むような気分が嘘のように晴れていることだろう。

ただ、吸収する方法が、その……キスっていうのは、やっぱり見ていて恥ずかしい。

「これが一番吸い取りやすいのよ。遠心力なんて目じゃないわ」

「誰が掃除機の話をしてますか！」

「よかつたらすすきちゃんも体験してみる？悩みなんかきつとどこかのお空に飛んでっちゃうわよ」

「ぜったいに遠慮します！」

危険な臭いが自分にたかつてきたような気がして、片付けの担当場所へ逃げた。

ちなみに、私はトワルカのことを『トワさん』と呼んでいる。愛称のほうがいいと本人から希望があったし、慣れるとこっちのほうは何となく呼びやすかった。

すすきの接吻回避をきっかけに話は一度切られ、店長の言う通りに店の片づけを始めた。

私の担当はホールの片付けだ。出入り口に『CLOSE』の札をかけて、ブラインドを下ろす。

それが終わったら、カウンターとテーブルとイスを拭いていく。今日の来客はあの男性一人だけだったみたいなので、大して汚れてはいない。普段から綺麗にするように心懸けているので、最低限の拭で済んだ。客足が少ないかもしれないが、この店の事情によって普段からこれぐらいの来客数なので気にしない。

テーブル周りが終わったら、床の掃除をする。客が少なくてもすすき達が店内を動いているために埃が溜まってしまっているので、毎日欠かさずにやっている。外からの来客があった日には靴底に付いていた砂埃が入ってくるので、きちんと取っておかないと床がざらついてしまう。お客様に気持ちよく飲食できるように、自分ができるところはきちんとやっておこうとすすきは思っている。

信矢はカウンター周りの片付けを担当している。キッチンの清掃やジュース、アルコールなどのボトル棚の整頓、食器の清拭、在庫数や消費期限の近いものがないか確認、ビールサーバーや今日使用

したエスプレッソマシンの分解洗浄など、とにかくやることが多い。食材の瓶には一つ一つに真空と紫外線遮断の魔法が処置されているので品質の劣化が訪れにくくなってはいるが、念のための確認作業だ。

すすきのようにある程度大雑把にやつてもできる清掃と違い、キッチン周りには小物が多いので繊細に取り扱わなければならない。片付けの場所の広さがすすきよりも狭いとはいえ、気を緩めてはいけない担当場所だ。

細かい作業の多いキッチン周りの掃除を、信矢は要領よく進めていく。ときばきとこなし、磨いた食器はいつもぴかぴかになっていて、すすきはいつも圧巻されている。もともと物を大切に扱う信矢の性格が仕事に現れているのだと思う。

荊歩はレジの金銭管理を任されている。レジの記録から決算を算出し、レジの中にあるお金と差がないか確認する作業だ。普段から客足の遠いチャームでは売上も微々たるものなので、精算が一番簡単な仕事かもしれない。

すぐに済んでしまうので、荊歩は終わるとすすきの片付けを手伝ってくれる。すすきの仕事も難しいものではないが、範囲が広いので手伝ってくれるとかなり助かっている。本当は信矢の掃除を手伝えるのが一番効率がいいのだが、女性恐怖症のためにいかんせん簡単にはいかないらしい。

店のオーナーであるトワル力は何をやっているかというところ、アクセサリー棚の整頓をしている。一応この店の売り上げの一端を担っているので無視できない仕事だが、普段から全員が気にかけている部分であるし、来客が多い店と違って商品が乱雑になることもない。別にやらなくてもいいところではないかと思っている。

客足の少ないこの店では実際に売り上げる商品の数は片手の指の数を下回る。何を販売したか振り返るだけで把握できそうなのに、

改めて商品棚を眺めて確認するものでもない。要は、トワル力は仕事をサバタージュしたいだけなのだろう。仕事をしているフリをするとは正直タチが悪い。

一連の片付けが終わると、晴れて今日の業務は終わりということになる。

すすきは両手を上げて体を伸ばす。この仕事が終わった直後の時間が割と気に入っている。全員で片付けを終わらせて接客用の態度を解くと、「今日も頑張った」という気持ちになる。

決して忙しい仕事ではないが、十三歳で仕事をしている身としては初めての職場でもあるので、毎日の取り組みが充実したものであるように留意している。

今日の場合も、お客さんが悪い気分にならなかったかとか、失礼なことを言わなかったかとか、ウェイトレスとしてふさわしい姿勢をきちんと取れていたかとか、自分なりに反省をして、あとでトワル力達にも訊いている。

上手くいったことと良くないことを考えて、明日の仕事ではいいことはそのまま伸ばし、悪いところは直るようにつけたい。単純な考え方だが、今の自分にできる努力の方法だと思っている。

「さて、それじゃ上がりましょうか」

トワル力がパンツと両手を合わせた。その鶴の一声にすすき、信矢、荊歩は、全員揃って二階に繋がる階段へと足を運んだ。

更衣室が二階にあるからというのが理由だが、大抵の場合はそのまま家族団欒へと入る。生活環境が二階にあるのでその流れもいつも通りだ。

階段を上る途中で、すすきは足を止めて一階と二階の間を見る。

そこには階を隔てる床と天井が見えるだけである。

「……いつも思っんですけど、どうなってるんでしょうね、この家」  
すすきは思った通りのことを口に出す。

「さあ……考えても分からないんじゃないかと」

信矢が同意の返事を言う。

ここで一応確認しておく。  
重複するが、この店は見た目が一階建てである。  
しかし、今は二階建てに繋がる階段を上っている。生活の場も二階にある。

つまり、どういふことかというところ……。

外観は一階建てなのに、中に入ると二階が存在するのである。

実際にトウルカにこの疑問をぶつけてみたところ、訳の分からない説明が返ってきたのを憶えている。内容が難しすぎてちゃんとは憶えていないが、スイングバイやパーセク、クエーサーなどの横文字の単語がちらほら使われていたような気がする。

いまだに疑問は晴れないが、生活するのに支障が出たことはない  
ので気にしないことにした。

「ほら、何止まっているんだ。後ろがつつかえてしまっただろう」

「あ、ごめんね荊歩」

後続の人から苦情が来たので、すすきは前へ向き直して足を進め

た。

階段を進みながら、後ろから再び声がかけられた。

「ところで、今日のお風呂はどうするんだ？」

「うーん、荊歩が良かったら、今日も一緒に入ってくれる？」

「あたしで良ければ構わないぞ」

「ほんと？」

「ああ。じゃあ準備しておくから、先にお風呂場に行ってくれ」

「うん、わかった。ありがとう」

荊歩と約束を取り付け、すすきは心を弾ませた。

お風呂というのは銭湯のような公衆浴場ではない。この家の中にある家庭用の浴室のことだ。他の同年代はどうなのか知らないが、すすきは一人ではいるより誰かと一緒に入りたいと思っている。その場合、大抵は荊歩に付き合ってもらっているのだ。

一般家庭の風呂にアルバイトであるすすきがどうして入っているのかというと、答えは至極簡単だ。

荊歩だけでなく、すすきと信矢もこの店に住んでいるのだ。全員がトワル力に許可を貰い、住み込みのアルバイトとして居場所をくれている。

どんな経緯があつてそうになったのかというと、それぞれ異なる理由があつてここにいる。

信矢は女性恐怖症を克服するため。

荊歩は不老の体を手に入れるため。  
そして、すすきは……。

「あら、すすきちゃんは荊歩と入るの？それじゃあ私も一緒に入る  
うかしら！」

「ええっ？トワさんも入るんですか！？」

突然のトワルカの参加宣言に、すすきは及び腰になった。

「駄目なのか？」

「だ、だめじゃないですけど……」

荊歩が不思議がって訊いてきたが、本当のことを言うのは恥ずか  
しかった。

（だって、トワさん、すぐ胸とか触ってくるんだもん……）

だが今はすぐ傍に信矢という男性がいるため、口に出すことはで  
きなかった。自分の体が原因だなんて口が裂けても言えるものか。  
信矢と荊歩が心配そうに窺うなか、トワルカは気に留めていない  
ようだった。

「別にいいじゃないの。久し振りに定期検診したい気もあるし」

「……は？定期検診って何ですか？」

言葉の意味が分からなくて、すすきは聞き返してしまった。  
その質問に、トワルカはほんわかと答える。

「もちろんカラダのよ。すすきちゃん、最近胸が大きくなってきたから触り甲斐がありそうだし」

「わー！ー！な、ななな何言ってるんですかトワさんっ！！」

「そつえば段々と膨らんできているな。女として羨ましい限りだ」

「荊歩も何変なこと言ってるの！！そ、そんなことないから！！」

「別に隠さなくてもいいじゃないか。この間は初めてブラを買ったんだろう？」

「なんでそんなことを今言ってる！？」

「買ったの！？何色！？」

「トワさん、目の色変えて食いつかないください！あと色なんか聞いてどうするつもりなんですか！？」

年上の女性二人を相手にするとすすきの個人情報は大だ漏れになりがちだ。女しかない場ならいいが、少しは周りを見て考えてほしいところなのに。

白一点の信矢は、「ははは……」と苦笑しながら気まずそうにしている。周りの人間のせいで自分のことを暴かれ、すすきは顔は真っ赤になった。

「あらあら、すすきちゃんは純情なのねえ」

「まったくだな。初々しいと見ていて微笑ましいよ」

「誰のせいですか誰の!!」

二人にからかわれ、すすきはそっぽを向いた。

何かと騒がしくて遅い個性のある人達に囲まれているが、この家が今のすすきの住む場所だ。

以前の自分にはとても想像できない、幸せに満ちた場所。できるだけここで長く暮らしたい。そう願ってやまない、愛おしい人達と場所。

少しでも手にしてられるよう、すすきは階段を上る足を早める。

過去から少しでも早く遠ざかれるように。

昔を少しでも遠くに追いやれるように。

一歩一歩が自分の未来を引き寄せられるように。

すすきは歩を進めていった。

## ep1 - 2 (後書き)

本作をお読みいただきありがとうございます。

最後は不思議な終わり方をしましたが、次話からはいきなり過去の話に入ります。

すすきがどんな経緯で今に至るのか、綴りたいと思います。

甘森礎苗

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2202ba/>

---

笑顔にまつわるマジックショップ

2012年1月5日17時54分発行